

消えたバラのお茶会。マカロンを添えて。

かしうり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

i bの軽率なアフターストーリーです。

個人的にこうなるんじゃないかな？位に軽率に書いてるんで気軽に地雷踏み抜くかもしれません。

目次

消えたバラのお茶会。マカロンを添えて。

消えたバラのお茶会。マカロンを添えて。

ある日晴れた昼下がり、ぼろいコートを着て、自宅の整理を慌しくする男が一人。

頭はなすびのような紫色をしていてわざと一部だけ残したような藍色の髪の毛がヘタを連想させ茄子をより彷彿させる。

「つてえ!?どこのどいつよ!私の髪の毛が茄子みたいとか言ったやつう!?!」

失礼。ギャリーはいつもの着こなして部屋の中を掃除していた。

曰く、かのゲルテナ伯の美術館にて起きた怪奇を共に乗り越えた少女、イブとの幾ばく目のお茶会。

その開催に先立ち、ギャリーは休日にしては早起きをし、少々汚い自室を整え、昼までに美味しいお菓子(主にマカロン)を買ってきて紅茶を作る準備をして、少し考え事をしながら待つ。

果たしてイブは喜んでくれるのか。この部屋はいいとこ育ちのイブには汚く映らないか。今日の髪形もいつもと変わらないか。など。つらつらと多くのこれからのお茶会のことについて考える。

「はあ……。それにしても、ホントよくお父様とお母さまが許してくれたわよね……」

これから一緒にお茶を飲むイブという少女は小学生だ。いわば口りに当たる。そんな彼女の両親がよく大学生くらいのオネエ口調の胡散臭い男と遊ばせてくれるのだとギャリーはしみじみと感じる。

しばらくそんな時間が続き、デジタル時計の表記が13:00になろうとするところに呼び鈴がなる。彼女が、イブが来た。そう思っってはーいと大きな返事をして、ドアを開ける。

「……こんにちは、ギャリー。」

ドアを開けると予想通り彼女とそこへ両親がいた。焦げ茶色の髪。紅い目。白いシャツに赤いスカートを着て少しぼーつとしている女の子。イブだ。

「ええー!こんにちはイブ!待っていたわ!それとご両親もいつもありがとうございます。」

そう返し、イブのご両親に頭を下げる。これも幾度となく繰り返された社交辞令のようになっていたがそれでもしつかり感謝を込めて頭を下げる。

「いえ、ごちんもいつも戻ってくるよ」とイブが楽しそうに話してくれるのでいつも笑顔で送り出せますよ。」

と朗らかに笑うイブのお父さんに、

「ええ。イブだったら今日も早く行こうと私たちをせかして「おぶうつ!? どうしたんだいイブ!」・・・あらあら。」

少し茶化そうとして笑うお母さん。少し照れ臭そうにお父さんに綺麗なボディブローをかますイブ。・・・いやあれはやりすぎよ。完全にみぞおち入ってたわ・・・。

「いっ。ギャリー。」

そう急かしてくるイブに引きずられながらでは、とドアを閉める。

そうしてお茶会が始まる。

イブに紅茶をいれて、お菓子を取り分ける。

本日のラインナップはマカロンとマカロン（大事）とクッキー。二人で対面に座り、お茶を飲み始める。そこで二人で様々な近況を話したり、少し席を離れてゲームを二人でやってみたりする。

その中でイブが楽しそうにしているのを見てただひたすらに微笑ましい。アタシにとって彼女は妹のような存在だ。彼女がアタシを少なくとも兄のように思っていてくれたらいいのだけど。そして何よりあの美術館で起きた悪夢を少しでも忘れてくれたら、なんて思いでこのお茶会を続けている。

アタシとイブは美術館の中で出会い、さまざまな苦難を乗り越えた。でもその代わりに美術館という言葉や何か飾ってあるときに恐怖や動くんじゃないか、という懐疑心をどこかでアタシ達は抱くようになってしまった。イブは特に。彼女は何かが表示されている、飾ってあるということに酷く恐怖を覚えるようになってしまった。いつかそれが反抗するのではないか? いつか自分を陥れようとするのではないか? そういった恐れを常に抱いて生きている。そんな彼女に寄り添えるなら、何か助けになるなら。そう思っている。

最初はそれは酷いものだった。テレビすら見れない。小綺麗に並べられた食べ物すら無理。

ご両親も手が付けられずに居たらしく、困り果てたところに私の連絡先をご両親にイブが教えて、今のよう流れになった。アタシもその頃は無理だった。ゲルテナという言葉を聞くだけで吐き気がしたし、写真や肖像、バラを見るたびに目を瞑って走って逃げていた。でもイブと再会し、マカロンを食べに行ったりして、社会に適合してきている。ここまで戻ってくるのに何時だって二人だった。だから、こんなことが起きたのだろう。

気が付けばアタシはイブに押し倒されていた。イブの顔を見つめると少し悲しそうな顔をしている。何がそんなに悲しかったのだろうか。

「・・・イブ？」

そう問う。反応はそんなに期待してはいない。イブが話したいタ イミングで話してもらうのが一番だからだ。

「ギャリー・・・。私は怖い。いつか、元に戻って、全部元通りになったらギャリーともお別れなんじゃないかって。それだけは嫌・・・。そうなる前に、何かしたくて・・・。でも・・・どうすればいいか・・・。わかんなくて・・・。ごめんなさい。」

彼女の独白。寂しさと恐怖が入り混じったイブの告白。アタシはイブを抱きしめる。

「大丈夫。確かにいつかアタシとイブはお別れするかもしれない。」

イブのアタシを掴む力が強まる。

「でもね。そうなる方が実はいいの。いつまでもあの美術館でのことを引きずっていられないでしょ？きつと忘れるための最後の方法はイブと会わなくなることなんですよけど・・・。アタシも今のところムリ、ね。一人で立ち直れる自信はないわ。」

イブが驚きの表情をしてアタシを見る。

「だから、これはアタシも同じなの。一緒にこれを治して。いつか他のみんなと笑えるように。ずっと外に出れないメアリーのためだとも思っ。頑張りましょ？」

メアリーは燃やした。だからもういないがきつと彼女だつてゲルテナの被害者。それを弔うくらいはしてやってもいいと思う。イブに素晴らしいながら笑顔を見せると、

「・・・うんっ！」

イブも笑顔を見せてくれた。

「じゃあ、お茶冷めちやっただろうし入れ直すわね。ちよつと待つて?？」

素晴らしいながらイブを抱きつつ立ち上がり椅子に座らせ、ティーポットをもつて台所に向かおうとする。すると、

「ギャリー。私も手伝う。」

素晴らしいながらアタシのそばを歩くイブ。

アタシは苦笑しつつじゃあ、お願いしようかしらなんて頼んでみる。

お茶会は、まだ始まったばかりだ。